鈴木　まづ早教育の問題から申しますと、簡単な言ひ方をすれば、苗(なへ)ですね。その苗をいかに立派に育てるかといふ問題です。それを人間に当てはめて考へればよく解(わか)るはずです。

人間の可能性については、まだほんたうのことが解ってゐない。教育についても、最高のいい条件や教育法といふものがまだ取り入れられてゐないんですね。その一番の大きな災ひとなってゐるものは、結果論から見た、生まれつきであるといふ観念ですね。何もかも生まれつきだと片づけてしまって大人の側の育て方を反省するといふことを忘れてゐるんですね。

石井　少しも環境とか、後天的なものの影響といふものを考へないんですね。

鈴木　子供の可能性を正しく見直した目でスタートしない人は、早教育といふものも見当違ひになりはしないかといふことですね。ですから石井先生が新しい問題を提供して、素晴しい成果をみせてくださっても、人びとはいかに見当違ひが多く、時代遅れと申しますか、そんなことを痛感するのです。

石井　私は教育は、生まれ落ちたその時から始まるものだと思って居りました。もっとさかのぼれば、胎教(たいきょう)と言って胎内(たいない)に在るころから始まると、昔からさう言った考へもあったのですね。どうも近年になって、かへって教育といふものがいい加減になり、特に学校教育だけにとらはれ、有名校に入るだけが教育だといふ考へ方のため、だんだん本来の教育から離れた方へと行ってしまふやうな気がいたしますが……。

早教育といふと誤解されやすいやうで、私はこれを適時教育と呼んでゐるんです。つまり音楽でもさうであるやうに、言葉、文字の教育でも、なんの抵抗もなく能率的に習得できる時期といふものがあって、その時期をうまくとらへてやれば、子供たちはなんの苦労もなく大変な能力を発揮するんですね。ところがその時期を逃がすと、その十倍もの労力を費やしてもなほそれだけの効果が上がらない、といふことは実際の経験から得たことなのです。

鈴木先生のやうに、突っ込んだ研究といふものがなされてゐないといふことが、とても残念ですね。初めから子供といふものは幼稚なもの、何もかも能力の劣ったものといふふうに考へられてきたのですね。

論理的なむづかしい思考といふものは無理ですが、感覚的なものは幼児期より他にはないと思ふのです。その能力を身につけていく早さと言ひますか、吸収のよさは、文字などはなんの苦もなく、一つの印として受け取り、それを思考の土台としていくんですね。それが世の中の人には少しも解ってもらへない。まったく歯がゆいですね。

鈴木先生は、それを三十年にもわたってやってこられたのですからなほさらだと思ひます。私も先生のお歩きになった後を歩んでゐるわけですが、まだ先生の半分にもいきません。